菊池寛文學全集

第十卷

文藝春秋新社

菊池寛文學全集　第十巻　五〇〇円

昭和三十五年七月二十日発行

著者　菊池寛

発行者　車谷弘

発行所　文藝春秋新社
東京都中央区銀座西八ノ四
振替　東京七八七四三

印刷・大日本印刷
製本・中島製本
製函・加藤製函

© 1960

目

次

三家庭　七
貞操問答　二三三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

解説

江藤淳

菊池寛文學全集

第十卷

編算委員

中村光夫　永井龍男　河盛好蔵　小林秀雄　川端康成　山本有三

三

家

庭

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

タクシー夜話

新宿まで客を送って、チラッと見た駅の時計が、丁度十時だった。こゝはまだ火の海、人の海、騒音の渦巻。十一月末の夜空は青暗く、星を散らして、この二、三日、寒さがさえて、ハンドルを握る指先に、しんと冷たさがしみ込んでいた。

露店の並ぶ街に、やたらに続く燈(ともしび)の数。紅(くれない)に、黄に、緑に、薄紫にと、色とり〴〵のネオンのスカイサイン。後や先に、ギッシリつまった自動車、五、六間先にお客らしい影を見出しても、警笛を鳴らしつゞけて、先の車の動きを促すだけで、なれた稼業とはいえ、いら〳〵して――これだから夜の新宿は、厭さあ――間がわるいと、四谷見付まで空車で流してしまう――と、徐行で、雑沓を押し分けながら、大木戸あたり迄くると、――もう内から幕を引いた硝子戸、お客のまばらになった屋台店。犬が、さも用ありげに通りを横ぎる。その歩道の際に、客ありやと目を配りながら、塩町の交叉点を越すと、向う側の洋品店の飾り窓、その横の小さな煙草屋の明るい灯影の中に、洋服と、鼻の先までショールを埋めた束髪の二人連れの姿が、一つに塊まって、どうやら自動車を求めているらしいのを、すばやく見つけて、急カーヴを切って、車を寄せると、ありがたし、互いの話に笑い興じながら、行

方も値も定めず、無造作に乗ってくれた鷹揚な客。そのまゝ十間ばかり走りだすと、
「権田原を通って、麻布市兵衛町よ。」と若い艶のある声。信濃町あたりでまた思いだしたように、
「それからまた、引き返して塩町迄帰ってもらうの。」とつけ加えた。
「いくらだい？」と寂のある男の声が、初めて訊いた。
思い切って一円といいたいところを、「八十銭で参りましょう」というと、
「丁度にしてあげるわね。」と楽しそうな女の声だった。
信濃町から、六本木に抜ける権田原、新坂町あたりは、昼間でも人通り少い、大きないかめしい建物ばかりの通り、まして十時を過ぎては、電車停留場の赤い灯ばかりさわやかな寂寞たる暗い街だった。暗い街を通るときは、座席の客の姿が、あざやかに前の硝子に映るものだった。
整然としたオーバーコートに、ぴたりと寄せた棒縞お召の膝。あごを引いて、唇元に微笑を浮べ、始終上眼使いに、物をいっている女は、美しい人だった。
無人の境を行くが如く、なんの障害物もなく、運転に気を取られないだけに、二人の会話は、切々ながら、ハッキリと耳にはいってくるのだが、二人の関係は夫婦とは思えず、妾とすれば女の態度があまり明るく品があり、素人か商売人かさえ見当が、つかなかった。
六本木へ出ると、また明るい街、前の硝子窓の影は、消えてしまった。
麻布の区役所を左に折れて、後は客の命ずるまゝ、右へ折れるとやゝ下り勾配の、打ち続く邸小路。中でも、相当広げな邸宅のコンクリート塀にさしかゝって、
「そこだよ。」と、男の客の声がした。

門の前で車を停めると、主人の帰りをかねて知ったか、門扉は開かれ、その辺に佇んでいた女中らしい小女の影が、前燈の光に照しだされ、パッと前栽の植込の中に、飛び退さったように見えたのを、男は気がつかなかったように、

「じゃ、気をつけて！」と、ものやさしい別れの言葉を残して、門の内に消えて行った。

門前の広場を利用して、ハンドルを二度に切って、方向を変えて、一、二間走りだそうとすると、今男がはいったばかりの門から、ひらりと降ってわいたように、走りだした、夜目に美しい女性が、

「その車待って下さい！」と、低いながら、鋭い叫び声で車を追いかけて来た。何か用事かと、すぐブレーキを踏もうとしたが、間髪をいれず、ほとんど同じ瞬間に、車中の女は、

「あっ！」と、叫びざま、素早く身体を片隅に避けると、「止めちゃダメ！　早く、早くスピードをだして！」と、いう必死な叫びだった。

呼び止めた女の声音に、ありありと不正なものに対する憤りを感じて、正義感に訴えられるものを感じはしたが、運転手としては商売大事、乗せているお客本位に動く方がと思ったので、思い切ってアクセルを踏むと、車は忽ち速力を増して、二、三度叫びつゞける声を後に、飯倉片町の通りに出てしまった。

明暗ただちに変る夜の町を、女はまだ不安げに、後からも横からも、のぞけないほど隅っこに身体を小さくして、物思わしげな唇元は、むすばれ通しであった。塩町で降りるとき、

「どうもありがとう。」

初めて、礼をいって、お礼心に、一円五十銭くれて、街路に降り立つと、ほっそりした後姿を、寒

そうに運んだ。
それから四谷見付、市ヶ谷、牛込へ、空車のまゝ流して——やっぱり、お妾だったのか、あの旦那、今頃はたいへんだろう——女中にちゃんと立番をさせて置いて、飛びだしてくるなんて、なか〳〵、ちゃっかりしている奥さんだな——などと、人のわるい一人笑いがこみあげて来た。
肴町から、少し築土の方へ寄った所で、ちょっと車を止めていると、その時、遠くハッキリと、消防自動車のうなりが、きこえて来た。
本郷か小石川方面の空が、うすら赤い。
と、神楽坂の方から、小走りに走って来た二人連れが、手をあげて、車に合図しながら近寄って来た。
二人乗るかと思えば、洋服の女だけ身もかるく、走り込んで、青年はドアに手をかけながら、残った。
「だいじょうぶ、春日町か指ヶ谷かですよ。だから落着いてお帰りなさい。あまり、お急ぎになって、事故なんか起す方が、よっぽどわるいですよ。ね、君あの火事は、小石川だろう?」
と、いきなり話しかけられて、運転手は、
「さあ!」と、あいまいに返事をした。
少しでも、引き止めたいらしい青年にかまわず、車中の女性は、
「駄目よ。宅は、とても心配性なんだもの。弥生町まで急いでね。サヨナラ。」と、運転手を促した。
ひどく焦りだした女に、青年は、ちょっとあきれたような、おこったような表情を見せながら、軽

く頭をさげるとバタンと、ドアを閉じた。

砲兵工廠傍を通って、水道橋に出ると、左手はるか高く低く、空を彩って、火の手は鮮やかだったが、方向はまさしく白山の方だった。

「やっぱり、本郷じゃないわねえ。安心したわ。」

さばけた物いいをしなければ、二十一、二と思われる黒ずくめの洋装の、しっくりと似合う愛らしい女。帝大と一高の間を入って、しばらく行くと、二つ太鼓で夜廻りが、

「火事は、白山御殿町、火事は白山御殿町！」

その夜廻りが、出て来た細い小路に、車をいれると、そこはしずかな屋敷町だった。

石柱に、鉄の扉のはいった家の前へ、車を停めて、火事を見に出ていたらしい女中へ、無言で意味ありげな瞬きを送ると、女中はニッコリしながら、首を振った。すぐ憚りのない明るい声で、

「御苦労さま。六十銭あげればいゝでしょう。」と、話の分った料金のくれ方だった。身軽に降りて、女中と並んで耳門から中へはいると、ハイヒールの小砂利を踏む音が、しばらくきこえた。

先刻から、後のバンパーが、ギイ〳〵と少し気になる音をだしていたので、降りて調べたついでに、門の標札を仰ぎ見ると、滝山新二と、街燈の光りで、ハッキリよまれた。新聞か雑誌で見たことのある名前だと思いながら、誰だったか思いだせなかった。

バックで、出るのには距離が遠いし、そのまゝ半丁ばかり徐行して、丁字路のところで、車を回してから、本通りへ引き返した。

池の端から、上野山下を流して見る気になって、藍染町の方へ降りながら（世の中には、美しい女

も沢山いるものだが、おかしな事も沢山あるものだ。今の女は、あの家のお奥さんに相違ないが、とすればあの青年は、なんだろう。だがあゝいう連中に限って、料金をケチ〳〵値切らないからいゝや）ボンヤリ、そんな事を考えていると交叉点に来たのに気がつかず、危く突き切ろうとして、左から来た三十二年のシボレーと、ぶつかりそうになって、あわててハンドルを切ったが及ばず、後のフェンダーにぶっつけてしまった。

交番は近いし、こっちの失策を弁解する由なく、とう〳〵相手の運転手に二円の損害賠償を取られて、二人の女性からもらった料金は、フイになってしまった。

（やっぱり、あんな連中を乗せるのじゃなかった）

と、後悔しながら、上野の方へ向ったのは、十二時近くだった。

お友達

宮川房子夫人が、向ヶ丘の見晴しのよい坂の上にある、静かな滝山博士の邸に、自動車を乗りつけたのは、夫人にして見れば早い外出の、しかしかれこれ、十二時近い頃だった。

取次ぎの女中の姿が消えると、忽ち、

「いらっしゃい！　どうぞ。」と、いつもながら、娘のようにあどけない甘ったるいその人が、手を取らんばかりの欣びで、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com